

モンゴル国ドンドゴビ県の壁フェルト作り

風戸真理



写真1:ゲルを解体する。行政区の中心地から草原へ移動するためフェルトの壁を縛り付けている紐を解く(1997年、アルハンガイ県)

母フェルトの存在

モンゴル人は「ゲル」とよばれる移動式の住居に住む。ゲルは、ヤナギやカラマツなどの木製の骨組みを大判のフェルトで覆った構造物である(写真1)。室内にもベッドのマットレスや床の敷物としてフェルトが使われている。ゲル全体では、約2×5〜6mのフェルトマットが夏には20枚、冬には40枚ほど使われる。フェルトは、編み組織も織り組織ももない、動物繊維を使った不織布である。遊牧民は、家畜の食草を求めて年に4回から10回ほど移動する。その移動のたびにゲルをたたみ、家財をウシの牽く車やラクダの背に乗せ、最後にフェルトを被せて梱包して次のキャンプ地へおもむく。厚く、硬い、多数のフェルトは、冬にはマイナス40度、夏にはプラス40度にもなる寒さ暑さや風雨から家族を守る。

今日のモンゴル国ではゲルの骨組みは木工職人や都市の店舗から購入するが、フェルトは自分で飼っているヒツジの毛から自分たちで作る。私はモンゴル国の3つの県でフェルト作りを観察した。モンゴルの建材用フェルト(以下、壁フェルトとよぶ)の製作においてもっとも独特な点は「エヘ・エスギー(母フェルト)」とよばれるものの存在である。エヘはモンゴル語で母あるいは起源を意味する。私が壁フェルトの作り方をたずねると、「母フェルトが要る」「母フェルトで作る」と言われた。母フェ

ルトとは約2×5〜6mの、壁フェルトとして標準的な大きさのフェルトである。倉庫に保管されている未使用品を使うこともあれば、ゲルの壁として実際に使われているフェルトを1枚はがしてやることもある。

フェルトの製作(ドンドゴビ県の例)

この連載では、母フェルトを使ったフェルト製作の工程を2通り紹介し、最終回では母フェルトの機能について検討する。今回は2001年9月9日〜10日に観察したドンドゴビ県のD D家から二世帯共同のフェルト製作過程を、順を追って紹介する。

最初の作業は「ノース・アワフ(毛を刈る)」である。羊毛の種類は次の3つに分けられる。すなわち、アハル(成ヒツジから秋に刈る毛)、オルト(成ヒツジから夏に刈る毛)、ホルガ(生後13カ月程度の仔ヒツジから夏に刈る毛)である。「アハルまたはホルガだけでフェルトを作ることができると、オルトだけではフェルトはできない」という。

次の作業は「ノース・サワフ(毛を打つ)」である。風の弱い日に戸外で種類ごとのフリース(刈ったまま洗っていないもの)を敷物の上に置き、約50cmの軽金属製の棒2本を両手に持って毛を叩く。かき混ぜながら何時間か叩いていると羊毛のクリンプがはぐれて繊維がばらばらになる。

それから「ノース・ゾラフ(毛を擦る)」と「プ

ンク・ヒーフ(ボールを作る)」がある。ノース・ゾラフは、羊毛の繊維の向きをおおまかに揃え、手のひら大に薄くまとめた小片を帯状に並べることである。毛を並べる向きは長辺の向きに統一する。一列終わると次の列に移り、その時に毛の端どうしを重ね合わせる。これは前夜にゲル内でろうそくの明かりでおこなった(写真2)。毛を並べる時には、幅約50cmの食品乾燥板や布地を台にし、台の上に毛をこすりつけるように並べる。ある程度できると巻き取る。布地も一緒に巻き込む。巻き取られた羊毛は大きなボールのようになる。ブンクは毛の種類ごとにつくっておく。ここまでがフェルト製作の前夜までの作業である。

当日、母フェルトの上にブンクを開いて並べる。この時は種類の異なる母フェルトを2枚使用した。1枚はより硬度の高いものであった。並べ方は下から、母その1、母その2(硬度がより高いもの)、アハルまたはホルガのブンク、オルトのブンク、再びアハルまたはホルガ、となった。重ね終わると全体を押さえて薄いところがないか手の感触で調べる。そして薄いところには「穴を埋めるように」毛を足すという。

それから、毛の上に水をまく(写真3)。井戸水から汲んできた冷たい水を、傾けたバケツの縁で手を素早く振り動かして水をシャワー状にふりまく。毛が十分に濡れてきたら裸足で毛の上を歩きながらさらに水をまく。その後、この全体を短辺の端から3人で押さえつけながら母フェルトもろともに巻き寿司のように巻く。この時「塩、石けん、心棒を使うか」と質問したら、「使わない」との答えであった。

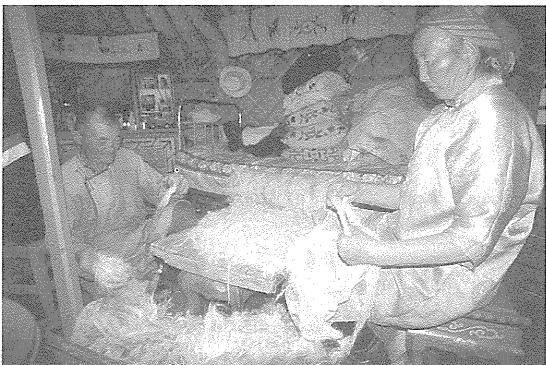


写真2:ブンク作り。DD氏が昼間に打ってほぐした羊毛を夜に夫で板に並べて巻いていく(2001年、ドンドゴビ県、以下同様)



写真3:母フェルトの上に並べた原毛に井戸水を振りまく



写真4:母フェルトと原毛を巻いたものを牛皮で包む



写真5:牛皮に包んだフェルト材料をラクダに引かせて転がす

母フェルトと原毛を巻いたものはさらに、数日前から水に浸して柔らかくした牛皮2枚でくるみ、革紐で皮どうしを縫うようにとじ合わせる(写真4)。最後に円筒の断面を皮で閉じるが、この時に「トムバイ、トムバイ(大きくあれ、大きくあれ)」と唱えながらバケツ一杯の水を内部にしみ込むようにかける。さらに「ヤスシク・ハトロー・ポローロイ、ツアシク・ツアガイン・ポローロイ(骨のように硬くなれ、雪のように白くなれ)」と祝詞を述べて開口部を閉じる。牛皮の中は水でたぶたぶしている。

これからラクダの牽引力を使った縮絨の工程に入る。まず牛皮で包んだフェルト材料に約60mの丈夫なロープを一巻きし、ロープの端を1頭のラクダの荷駄用ベルトに留め付ける(写真5)。男性がラクダを導いて35〜45m進ませてフェルト材料を転がす。次にロープの反対の端をラクダにつなぐ。そしてフェルト材料を反対方向へ35〜45m転がす。往復60回転がすことが羊毛を縮絨させる作業の1セットである。その3分の1をラクダで、3分の2はウマで牽く。ラクダは力が強くて耐久力があるが、遅い。ウマは速くて便利だが、すぐに疲労して歩かなくなる。

フェルトは完成までには3セットの転がしを必要とする。母フェルトとの関係でいえば、原毛を並べて1セット転がしたものは母になれる。上記の母その1がこれにあたる。より硬質な母その2はすでに2セット転がされたものであり、これに今回の1セットの転がしを加えて縮絨が完了した。縮絨が完了したフェルトは濡れているうちに伸ばして大きさを調整する。フェルトの中央に成人が一人立つ

て乗り、周囲を6〜7人がつかんで引張り、中央の人がジャンプしながらフェルトの間々を靴のかかとで蹴る。

強靱な壁フェルト

今回のフェルト製作でできたフェルトは全部で8枚であり、そのうち3枚がD D家、5枚がもう一世帯のものである。畜力は融通し合うが、完成品は羊毛の持ち主のものになる。D D家の3枚の内訳は、①原毛から作ったものが1セット終わっていたもの。これは倉庫に入れて保管しており、今回2セットの転がし縮絨を加えて完成した。②以前に作った時に失敗して穴だらけになったもの。これにホルガ毛を足して穴をふさごうとしたが、成功した部分とつかなかった部分があった。

D D家のフェルト製作をまとめると、原毛の状態から転がしが1セット終わった状態、2セット終わった状態、3セット終わった状態の3段階の縮絨工程を経てフェルトは作られていた。転がしが1セット終わると母になれるが、これは壁には使えない。2セット終わるとより硬度が増しているが、やはり母にはなれても壁には使えない。3セットの縮絨工程を経過してはじめて、雨風や暑さ寒さから家族を守り、年に10回にもおおよぶ頻繁な移動にも耐える壁用フェルトができるのである。

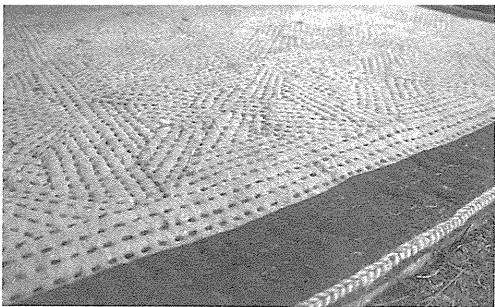
風戸真理(かごと・まり) 人類学者。1994年からモンゴル遊牧民の生業技術と社会変化について研究している。著者に「現代モンゴル遊牧民の民族誌」「京大探検部」「モンゴルの家族とコミュニティ開発」「フィールドワーク最前線」。

モンゴル国ザブハン県の壁フェルト作り

風戸真理

巨大なフェルト(エスギー)

写真1: 寝台用マットレス。羊毛フェルトに、ラクダの毛を紡いだ糸で刺し子をほどこして強度を増した(1998年、アルハンガイ県)



本連載では、モンゴル国で作られている約2×5〜6mの巨大なフェルト(エスギー)の製作技術について検討する。モンゴルの牧民はウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの5種類の家畜を飼育しており、とりわけヒツジは牧民の衣食住全般に重要な役割を果たし、羊毛フェルトは彼らの移動式住居「ゲル」の建材および内装素材として欠かせない。ゲルは季節により20〜40枚のフェルトで覆われる(写真1)。壁と屋根のほか、円形の床には5枚組のフェルトマット「シルデク」、寝台のマットレスには長方形の「ゴダス」が敷かれる。マット類にはラクダの毛を紡いだ糸で刺し子が施される。これら多様なフェルト製品は、成形のしかたや刺し子の有無などの点では異なるが、フェルト本体の作り方は基本的に同じである。よって、建材と内装用のフェルトをまとめて「壁フェルト」とよぶ。壁フェルト製作の技術上の最大の特徴は、「エヘ・エスギー(母フェルト)」を用いて、数年に1度、1〜2日間で集中して巨大なフェルトを多数製作するところにある。なお、「エヘ」はモンゴル語で、母・始まり・起源などを表す語である。



写真2: 牛皮で包まれたフェルト材料をウマで牽引して転がす(2004年、ザブハン県、以下同様)

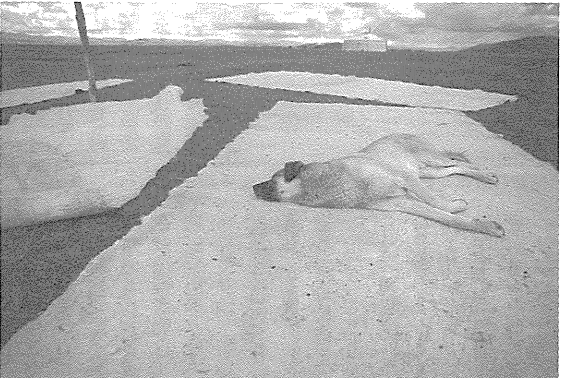


写真3: 途中段階のフェルトが広げられている。順番に包まれては転がされる



写真4: 大きさの調整のために7人でフェルトを引っ張っている

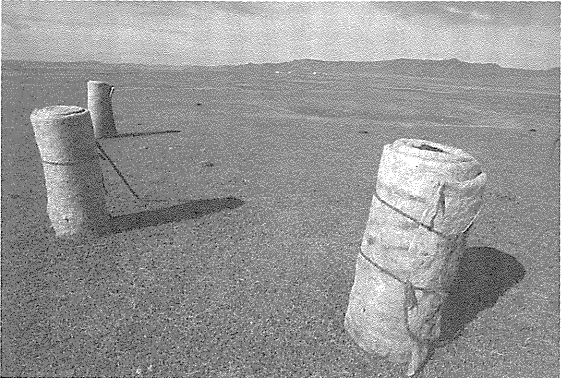


写真5: 完成したフェルトが脱水のために巻いて立てられている

子を紹介する。日取りは、「牧民の暦」とよばれる農事暦に似た暦に従ってフェルト製作の吉日が選ばれる。

5段階の縮絨工程

今回のフェルト製作技法の特色を先に述べると、原毛の下処理に投下する労働力が少なく、その代わりに縮絨の工程が5段階にも微細に分けられている点にある。これに対して、前回紹介したドンドゴビ県の例では、原毛は前日までに打ってほぐし、さらに手で繊維の向きを整えて型に並べるなど、羊毛に対して精緻な働きかけをおこなう一方で、縮絨の工程は3段階とシンプルであった。

ここで、モンゴルにおける羊毛を縮絨させる方法についてまとめておく。濡らした原毛に、原則としてラクダやウマなどの家畜の動力を利用することで、摩擦、圧力、振動を効率よく加えて縮絨させる。具体的には、フェルトの材料を「母フェルト」に包み、濡らして円筒状に巻き、これを家畜で牽引して地面を転がすことにより羊毛をフェルト化させる。ザブハン県の観察では動力にはウマを用い、50mの距離を20〜25往復牽かせて転がすことを1単位として、これを1「タル」とよんだ。1タルを経ると原毛は「ニヤラフ・エスギー(乳児フェルト)」になる。2タルで「フング・エスギー(軽フェルト)」、そして3タルを経たものが「エヘ・エスギー(母フェルト)」として

縮絨単位を経た未完成のフェルトである。濡らした母フェルトの上に乳児フェルトを載せ、乳児フェルトに十分に水をまく。この上に「ウング・ノース(化粧の毛)」を置く。化粧の毛とは、「ホルガ*」や「アハル*」の柔らかくて短い毛を打ちほぐしたものである。これを乳児フェルトの長辺の向きに沿って置いていく。「水をまいてあるので」原毛は乳児フェルトにつかないという。また「ウング・ノースを置かない」とよいフェルトができない。そしてこれらの上に、先ほど棒に巻き取ったトルを広げる。その上から毛が内部まで十分に濡れるように全体に水をまく。

母フェルトの短辺の毛を並べる始点になった方に丸太を乗せる。そして丸太に、原毛、乳児フェルト、母フェルトを合わせて巻き取るように巻き取っていく。巻き取った毛の種類と状態を下から順に説明すると、母フェルト、乳児フェルト、化粧の毛(アハルやホルガ)を打って長辺の方向に擦りつけてちぎった毛、フリースの網、任意の原毛を長辺の方向に擦りつけてちぎった毛(打ってある方が望ましい)である。これらの全体を、水に浸して柔らかくした牛皮2枚でくるみ、牛皮内部に十分な水を入れてから口を閉じる。

牽引用には、一本の革紐を丸太の両端に直接に結びつける(写真2)。革紐の中央から2本の革紐を伸ばす。それぞれの端を約70cmの木の棒に結びつけ、これを騎乗の男性2人がそれぞれしっかりと握る。彼らは並んでフェルトの材料を50m引いて転がし、次に50m戻る。この往復を20〜25回すると1タルという。この包み内部の乳児フェルトはこれから1タルを経ると軽フェルトになる予定である。い

使える状態というわけである。さらに続けて4タル転がすと「アダク・エスギー(終わりフェルト)」とよばれ、5タルを経ると本当の「エスギー(フェルト)」が完成する。原毛は5段階の縮絨工程を経て壁フェルトになるのである。

フェルトの製作(ザブハン県の例)

それでは実際のフェルトの製作工程を順を追って説明する。なお羊毛は洗っていないものを使用した。第1回目(9月号)で説明したことがらには「」を付すので、随時参照されたい。まずビニールシートの上に1頭分のフリース(ほぐしていないもの)を「トル(網)」と呼んで2×6〜7mに網状に広げ伸ばす。これがフェルト化するると6〜7mの長辺は4〜5mに縮み、2mの短辺はあまり縮まないという。次に「サワフ* (打つ)」していない原毛を、トルの長辺の向きに沿って「ゾラフ* (擦る)」する。すなわち、打ちほぐしていない羊毛を、繊維の向きをおおまかに揃えて手のひら大のかたまりにし、これをトルに擦りつけるように並べる。「打っていない毛を使う」と羊毛が多く要る。打った毛を使うと羊毛が少なく済む」という。毛の量は、毛を置いた時の手の感覚で厚さが十分であるかどうか判断し、足りなければ足す。「打った毛では薄くて硬いフェルトができる。打っていない毛で硬くするためにはフェルトが厚くなる」という。この時、打ちほぐした毛を使ってもよい。トル全体に毛を置き終わったら、細長い棒を芯にしてフリースの網ごと巻き取る。棒に巻き取られた毛玉も「トル」とよぶ。

次に母フェルトと乳児フェルトを用意する。母フェルトは3タル、乳児フェルトは1タルのまま毛を並べたばかりの最上層は1タルを経ると乳児フェルトになる。そして一番外側にある母フェルトは最後フェルトになるのである。これとは別に、すでに縮絨の進んだできかけのフェルトがいくつもあり、これらを順番に巻いて転がす作業も同時に進められた(写真3)。それらを重ねる順番は下から、母フェルト、最後フェルト、軽フェルトであった。1タルを経たものは次には端を内側に折り込んだんで封筒状に小型にし、これを2枚重ねて棒に巻き取って転がすこともあった。

完成したフェルトは濡れているうちに形を整える。成形の基本は、縮み過ぎた部分を引張って伸ばして修正することにある。長さの基準には、オールガというウマを捕まえる棒を利用した。全体を伸ばす時には7人が周囲につめて並び、縁を深く握り込み、力一杯引張ることを繰り返す(写真4)。一部を集中して伸ばす時には、2人がフェルトを引っ張り、その間を角材で叩く。中央の厚みを伸ばすには、フェルトの周囲を数名の人が引っ張り、力のある人が上に乗って、トランポリンのような状態でバランスを取りながら靴でフェルトの面を蹴る。最後に縦に半折して巻き、地面に立てて脱水した(写真5)。

モンゴルのフェルト製作の豊かな技術とそのパラエティーは深く広い。今回は母フェルトに注目してその技術的な機能と意味について検討する。

風戸真理(かごと・まり) 人類学者。1994年からモンゴル遊牧民の生業技術と社会変化について研究している。著書に「現代モンゴル遊牧民の民族誌」「京大探検部」「モンゴルの家族とコミュニティ開発」「フィールドワーク最前線」

母フェルトとは何か

モンゴルのフェルト小物

本連載ではこれまで、母フェルトを使って作る約6畳サイズの壁フェルトについて紹介してきたが(写真1)、実はモンゴルには母フェルトを使わずに作るフェルト小物がある。長靴、茶筒、塩入れなどの筒状の日常生活用品である。その作り方は日本の手芸教科書に書かれているのとはほぼ同様である。すなわち、型紙として布やビニールを使用し、羊毛の縮絨を促進させるためのアルカリ性物質として塩を加え、羊毛のキューティクルを開かせるのに湯を利用するのである。

1996年12月、ウムヌゴビ県でフェルト長靴製作を観察した。まずキャンパス生地を靴形に切り抜き、約60×40cmの板の上に置く。この型紙は板いっぱいのサイズである。次に、洗っていない原毛をほぐしながらちぎり、型紙の上に鱗状に並べる。その中央に、ひとまわり小さい靴形のキャンパス生地を置く。袋形の小物を作る時の要領である。その上に再び原毛をのせ、縁を折り込む。

ここから縮絨の工程に入る。湯を張ったたらいの中に板を立てかける。セットした原毛の上に砕いた岩塩を振りまき、湯で全体をよく濡らす。これを型紙のキャンパス生地巻き寿司状に巻きとる。巻き物内部の層の並び方は、下から、大型キャンパス型紙、原毛、小型キャンパス型紙、原毛、である。巻いたものを板の上で最初はやさしく、次第に力を入れて転がす。途中で開いて羊毛を巻く方向

風戸真理

を何度か変える。最後に、長靴の口部分をナイフで切り、中表に返して完成である。

右記からいえるのは、モンゴルの小物作りでは、科学的な知識を取り入れた西洋近代的な技術と共通する方法が用いられているということである。

母フェルトの機能

ではなぜ、壁フェルトでは母フェルトを使う特殊な技術が用いられるのだろうか。母フェルトは壁フェルト製作には不可欠だといわれる。

母フェルトの機能は第一に型である。約2×5〜6mの大きさの母フェルトの上に原毛を配置し、くずれないように加圧して、縮絨後に伸ばしてサイズを調整すれば、母とはほぼ同じ大きさのコピーができる。第二に下敷きである。日本では下敷きとしてビニール、キャンパス生地、簾などを使い、この上に原毛を並べてビニールごと巻き取る。モンゴルでも、自然や交通の条件により柳等の簾が入手できる地域では、ゲルを簾で巻き、フェルト製作にも簾を利用する。しかし、私が調査した二つの地域には簾も大型ビニールもなかった。母フェルトの第三の機能は、実際にゲルの壁として使える実用品である点である。フェルト製作のための専用の道具ではないのである。

毛の下準備と畜力による牽引

毛の扱い方と畜力による牽引との関係について、これまで2回の観察結果を比較してみよう。ザブハン県のフェルト製作技法の特徴

もらえるだろうという算段があり、共同製作の依頼を引き受けた。

この共同製作では、DD家が最初の母フェルトを出した。これは、前年までに途中まで作ってあったフェルトで、壁には使えないが、母フェルトとしては使える縮絨段階にあった。ただし、母フェルトというモノさえ借れば誰でもフェルトが作れるわけではない。一緒に作業をする経験を通してはじめて母フェルトの使い方を始めとするモンゴル式フェルト製作の技法が身につく、フェルトが作れるようになるのである。

さらにいえば、モンゴルではフェルト製作を見たら手伝うべきだという理念がある(写真2)。ザブハン県では、約2km離れた隣のキャンブの人びとが差し入れのお茶をもってきて作業を手伝って帰った。また騎乗の若者2人が、通りがかりに自分たちのウマでフェルト材料ロールを何往復か牽引した。フェルト作りは、1世帯にとつては数年に1回の行事である。フェルトの製作技術の次世代への伝達には、世帯内での伝達に加えて、地域における相互扶助として近隣の人びとが実際に共同作業に参加するという身体経験が大きな役割を果たしているように思われる。

具体的というと、フェルト製作のさいに注意すべきこととして、母フェルトの上に原毛を並べる時に薄いとこがならないようにと言われる(写真3)。実際に薄いとこがあると穴が空いてしまう。「厚さを均一にするのがコツ」と言葉で伝えることは簡単である。しかし実践するのは難しく、できたフェルトにはよく穴があく。壁フェルト作りにおいては、古参者と新参者が一緒に原毛の上をはい回って一

は、人間が投入する労働力を最小限にとどめ、代わりに家畜の動力(40m×2×60往復×3セット=14400m)と原毛を多量に使用するというものである。毛の扱い方に関しては、毛をほぐしたり繊維の方向を揃えたりする労働を最小限におさえ、多量の原毛を使用することで厚みを補っていた。

一方、ドンドゴビ県の特徴は、毛を打ってほぐした後に手で毛の繊維の向きを揃える作業を深夜までおこなうなど、毛に対して精緻な働きかけをした。代わりに、使用する家畜の動力(50m×2×25往復×5タール=11250m)と使用した原毛の量は比較的少なかつた。なお1枚の壁フェルトを作るのに約25kgの原毛が必要といわれる。両者の牽引距離を比較すると、ザブハン県で羊毛の縮絨にかける家畜の動力エネルギーが約1.3倍と多めであった。なおモンゴルには、フェルト製作専用の道具はきわめて少ない。心棒やその付属品を使う地域もあるが、ドンドゴビ県の例のように、壁フェルトは、母フェルトと原毛、そして牽引動物だけで作れるのである。

フェルト製作と社会関係

次に母フェルトの使用をめぐる人びとの社会関係について検討する。ドンドゴビ県ではDD家とBB家の2世帯が共同でフェルト製作をおこなった。若いBB家は5枚のフェルトを必要としていたが、自分たちだけで作る技術がなかった。そこで長老格のDD家に共同製作を申し込んだ。DD家は、親しい近隣世帯からの頼みを断るわけにはいかなかった。また、BB家はDD家よりも多くの家畜を所有しているので牽引用の家畜を多めに出して緒に手で毛を押さえることで、毛の薄い箇所

フェルト製作技術の伝承

実は、社会主義期にはフェルトは国营工場で集中的に生産され、牧民は国家が所有する家畜の世話をして得た給料で、工場製のフェルトを購入していた(写真4)。ところが1990年代初頭、体制転換にもなつて工場が破産し、フェルト生産は滞った。人びとはふたたび自分の家で使うフェルトを自分で作り始めた。その一例がBB家の挑戦であった。BB家の依頼に対してDD家の人びとは、母フェルトというモノの供与とともに、彼らと二日間の作業を共にすることで、自分たちの経験知を若い世代に伝授した。かつてDDからも先達から技の伝承を受けたのであり、BBからも次の機会には伝える側に回るかもしれない。母フェルトを使った壁フェルト製作技術は、母フェルトというモノを手がかりに、道具をほとんど使わずに、毛の扱いに関する手の感覚といった身体知を、共に作業する時間を過ごすことにより伝えていく、身体知の継承の歴史的な過程であると考えられる。

追記・本企画のためのモンゴル式フェルト製作技法の実験は、天野貴子さん、畑中晶子さん、高橋美雅さんらの協力により可能になった。深謝いたします。

風戸真理(かごと・まり)
人類学者。1994年からモンゴル遊牧民の生業技術と社会変化について研究している。著書に『現代モンゴル遊牧民の民族誌』『京大探検部』『モンゴルの家族とコミュニティ開発』『フィールドワーク最前線』

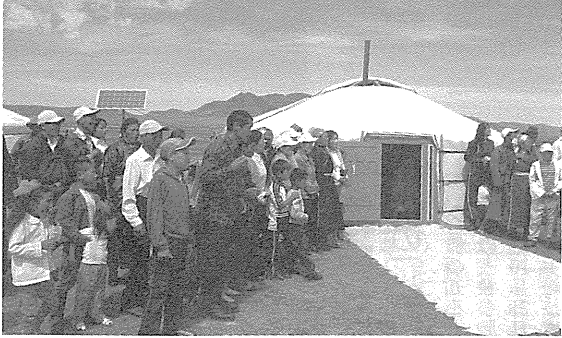


写真1:結婚式で花嫁を待つ人々。到着した花嫁は真新しい壁フェルトの上を歩いて新居に入る(2004年、ザブハン県)



写真2:ゲルを新築するため、女性たちはフェルトの縫い仕上げを、男性たちは骨組みの調整をおこなう(同上)



写真3:母フェルトの上に原毛を丁寧に並べるドンドゴビ県の人々(2001年、ドンドゴビ県)



写真4:フェルト工場。家畜の代わりに、モーターで動くローラーで羊毛を縮絨させる(同上)